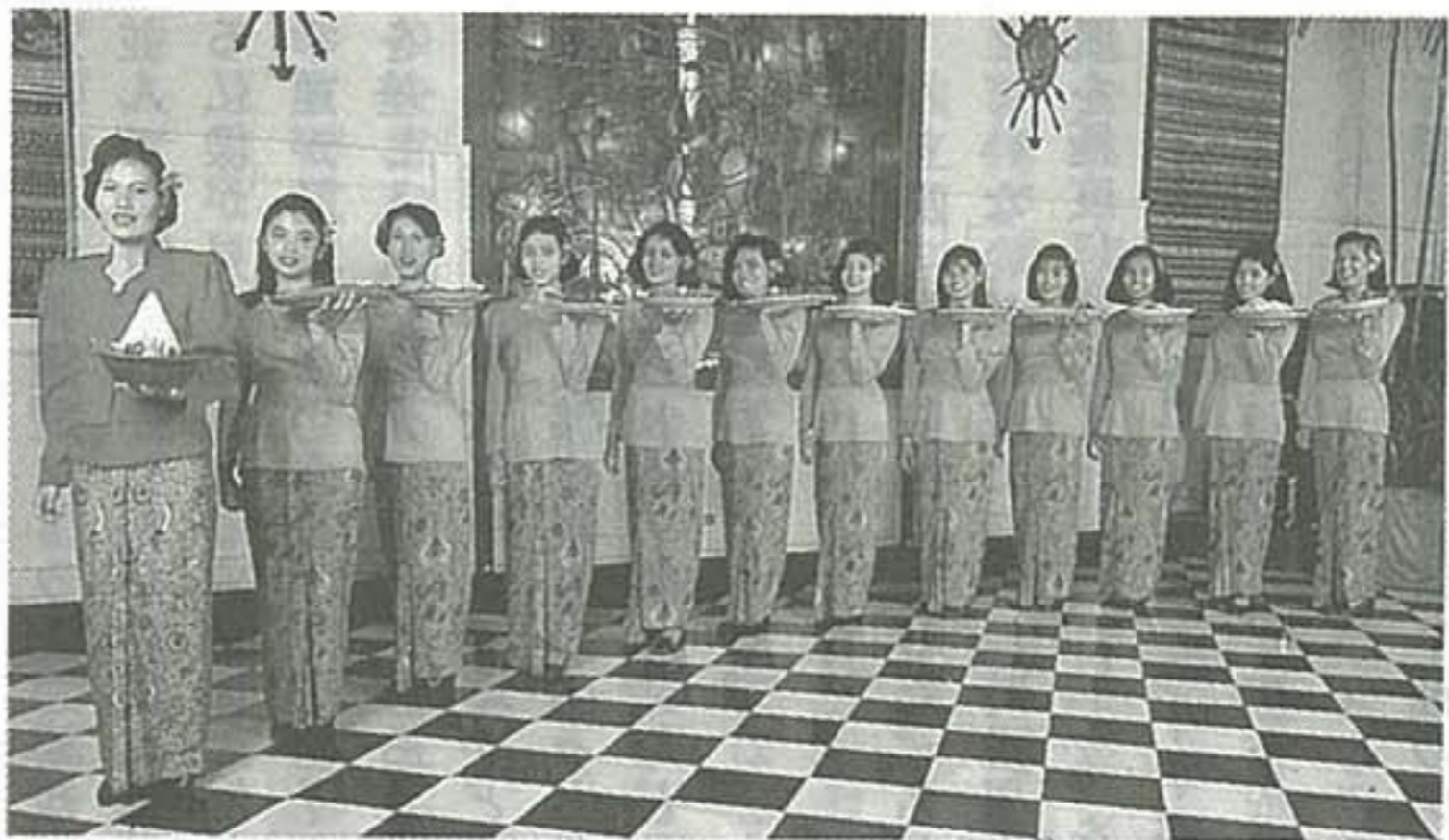


ここでは、客の要求がなければフォークやナイフは出さない。ジャカルタの食事は右手の指を使って摘んで食べるのがマナーであり、これを忠実に守っている。高級レストランで大きな皿に次々配られる



「10数品の料理を10人余りの美人ウエイトレスが……」
レストラン「オアシス」で

る料理を指で摘んで食べたが、まさにインドネシアに來たという実感がした。

終わりに

インドネシアは私としては初めての旅行であった。水に注意しなさい、下痢に気をつけてなど、みんなから注意をされたの旅行であったが、とにかく無事目的を果たして帰国することができた。終始楽しく行動できたのは、テニスという共通の目的があり、お互い知っている仲間が多かったからと思う。一般募集の旅行社のツアーでは味わえない楽しい旅行であった。

ホテルの食事はおおむねバイキングであったが、みんな美味しいと云っていた。私もつい釣り込まれて食べ過ぎの感があった。ホテルの部屋に無料の「ミネラルウォーター」の備え付けがあり、飲料には心配はなかったが、やはり暑さと食べ過ぎ、疲労も加わり、下痢症状を起した。インドネシアの至る所のトイレットにご厄介になった。

インドネシアは世界地図の上では知っていたが、足で踏むのは初めて。赤道をはさんで約一万三千以上の島々からなる群島国家であり、その中心はジャワ島、全人口の三分の一を占めているとのことであった。国民の九十四%がイスラム教、残り六%がキリスト教、ヒンズー教、仏教などである。気温は最高三十一度、最低二十三度、高温多雨で四季の変化に乏しく、昼と夜の温度差は激しい。

インドネシアは、一九四五年八月、オランダの植民地支配を脱して主権を確立し、独立国家となった。その陰には日本人の大きな協力があった。私の日銀時代の友人、今西嘉寿知君もその一人である。彼はパレンパンの南スマトラ燃料工場で現地の兵隊を指導して義勇軍を育てた。インドネシア独立までにはいろいろのドラマがあったと思う。これを機会にインドネシアの歴史を詳しく調べてみたいと思っている。

(平成八年七月七日記)

北に一星あり

—その出典について

昭和五十六年春ごろ、私はある書物を読んで、かつて小樽高等商業学校が「北に一星あり、小なれどもその輝光強し」と評されていたことを知り、その簡潔で要を得た表現に、強い感動を覚えたことがある。

そして同年七月におこなわれた創立七十周年記念行事で、この言葉を挨拶のなかに借用し、また翌五十七年三月、卒業式の「告辞」のなかでも使用した。さらに、国立大学協会と大学入試センターが編集した「国立大学ガイドブック」で、私はこの言葉を使って小樽商科大学を紹介した。

東京に転居してからしばらく経って、篠崎恒夫教授よりの電話で、「北に一星あり」の出版を尋ねられた。しかし迂闊にも、あの印象深い言葉との出会いが、何という

書物のどの箇所であったか、はつきり記憶していなかったのである。心当たりの書物を二・三あげてはみたが、再度電話を頂戴し、それらには見当たらずとのことであった。

翌年母校を訪れたとき、当時眼を通していたと思われる書物を、図書館の書庫で調べてみたが、どうしても見つけないことができない。引用文の出典を明らかにするという、研究者としての基礎的な作法をおろそかにした失策に、私はただただ恥じ入るばかりであった。

小樽商科大学から出される刊行物に、この言葉がよく使われるようになって、今度は事務の小泉信隆さんから電話があり、その由来について問い合わせをうけた。大学で現在使われているのは、私が学長在任中に幾度か使用したこと起因する

ものと思うが、ただ私自身それを何処で見たのか、肝心な最初の拠り所については、その後調べているがまだわからない、と釈明した。

たまりかねて小泉さんが、「ではとりあえず、先生の言葉ということにしておいてよいか」と言い出すのを、「それは困る、確かにある書物の中に書いてあったのだから」と留めたものの、自分で読んだ書物を失念してしまい、いまだに挽回できないでいると言う失態に、全くほぞをかむ思いであった。

気がかりな宿題をかかえたまま時が過ぎた。ところが最近古い書類を整理しているうちに、年来の懸案を解くいとぐちが見つかったのである。どうしてそんな所にまぎれ込んだのかわからないが、母校で過去におこなわれた創立記念行事を、

長谷部 亮一

(昭19年卒)

年代順に箇条書きしたメモがあり、その二十五周年に当たる箇所の欄外に、「北に一星あり、小なれどもその輝光強し」と、書き添えてある。

どうやらこれは創立二十五周年の記念行事に関係があるらしいと考へ「緑丘五十年史」を調べてみた。同書の六十六七ページに、二十五周年記念行事の記事はあるが、探し求める言葉は見当たらない。それではと、「小樽商科大学史」開学六十五年一で、二十五周年記念に関する記事を追う。そしてとうとう探し当てた。同書の二二一ページに、「渺々たり日本海、翠緑薫陶たり慈愛の丘、北に一星あり小なれどもその輝光強し、緑が丘に築きたり二十五周年文化の跡。」とあるではないか。

あのとき一読して強い衝撃をうけた文章は、まさしくこれであつたと、私は久しく消息不明の旧知に、ようやくめぐり会えたような感激を味わった。それにしても、これは誰の言葉なのであろうか。前記の文章は、昭和十一年七月に創立二十

五周年の記念式典が華々しく挙行されたという記事の一部をなし、とくに引用の記載もないので、编者自身が書いたものと思われる。

だが注意してその前後を読みかえしてみると、くだんの箇所は記事の他の部分と、いささか文章の調子が違うようである。記念行事にかかわって、誰かが使った言葉なのか。「緑丘五十年史」によれば、「緑丘新聞」が十二ページの特集号を刊行し、記念行事に参加したとある。当時の新聞を調べると、何か手がかりが得られるかもしれない。

昭和十一年七月五日発行の、「小樽高商緑丘新聞」第九十四号が、創立二十五周年記念特集号である。一ページから順次、見落としないよう入念に眼を走らせる。すると一〇ページに、同新聞を編集した高商編纂部の、「二十五周年記念を迎へて」と題する部説があり、その冒頭に「渺々たり日本海」で始まる文章が、そっくりそのまま載っているのである。ただし部説では、「小なれどもその輝光強し」といっ

ている。「小樽商科大学史」では、この部分を引用符号もつけず記事のなかに借用した、と推量される。

それまで私は、「北に一星あり」というのは、小樽高等商業学校に対する外部からの批評と思ひ込んでいた。そのように誤解してしまったのは、「小樽商科大学史」の編集が、財界評論新社の教育調査会校史編纂室によるものであり、したがって緑丘関係者でない编者が書いたと勘違いさせる文章のなかに、この言葉を見い出したためであろう。

しかしそれは、外部からの賛辞ではなく、学園に集うものの気概と矜持を、みずから高らかに謳う宣言なのであつた。「北に一星あり小なれどもその輝光強し」この珠玉のような名句が、緑が丘のなかで長い間、誰からも注目されずに埋もれていたのは、まことに不運なことといわなければならぬ。私はあらためて、昭和十一年当時の編纂部員諸兄に、深甚な敬意を表すとともに、この言葉が小樽商科大学で永く愛用され、そこに学ぶひとび

上哲夫さんである。ここに付記して、謝意を表したい。

とを鼓舞しつづけることを、心から願つてやまない。

付記

拙稿を最初にお読みいただき、関係文

スコットランドの シヤクナゲ庭園めぐり

アメリカシヤクナゲ協会の五十一周年総会（平成八年五月五日―十一日）に出席した。個人ではあまり行く機会の多くないと思われスコットランドの旅をしたので、その時の模様を書くことにした。

この総会は、スコットランドの北西部のオーバンという人口約七千人の港町で行われた。オーバンはゲール語で「小さな湾」という意味で、昔からウイスキー、昆布、スレート石、羊毛、ガラス等の積出港であり、周辺の島々へのフェリーボートの出港地でもある。

参加者は、六百人弱で、九十五％は米国土土からの会員であり、老人夫婦が多

く、ドイツ、フランス、オランダ、ノルウェー、ニュージーランド、オーストラリア、中国、そして日本からは二人が参加した。

この総会は、米国土土、カナダ地区以外のスコットランドで初めて開催された総会で、出席の登録料および宿泊の予約が二年前から始められ、六百人という限定条件で行われたものであつた。

理由は宿泊設備がないため、町の中やホテルも古いタイプで、私が宿泊したリゾートホテルも六十室中五室だけがバス付きで、部屋には電話がなく、一階に公衆電話があるだけであつた。他のホテル



庭園城ディックプロ
筆者

大崎 康市

（昭19年卒）

にもバス付きの部屋は殆どないのが普通であつた。

しかしバーや食堂は、昔ながらの立派な部屋で、サービスもゆつたりと時間をかけて行うというやり方に、私達はほとほと参つた。

緑丘会は緑丘会員の年会費によって運営されております！

年会費の納入に是非ともご協力下さい。毎年納金することが面倒な方には何年分でも一括送金を受けつけています。

「緑丘」次号発行予定

○原稿締切 平成九年五月末
○発行予定 平成九年八月

会報委員

会報委員長 井上 哲夫 (昭18年卒)
委員 石川 邦夫 (昭24年卒)
岡林 宏 (昭28年卒)
関根 寿夫 (昭34年卒)
座間 忠雄 (昭41年卒)
三村 孝子 (昭44年卒)
中村 弘治 (昭52年卒)

緑丘 第81号

平成九年二月二十四日 印刷発行

発行人 社団法人 緑丘会

理事長 香木正雄 (昭16後)

編集人 会報委員長 井上哲夫 (昭18)

発行所 緑丘会東京事務所

〒170 東京都豊島区東池袋3-1-1

電話 〇三(三九八二)二三四〇

FAX 〇三(五三九六)四〇一一

振替 東京二一八九五八九

印刷所 ヤマノ印刷株式会社

東京都中央区日本橋本石町

4-2-3

電話 〇三(三二四二)一九〇一

禁無断転載

日本中の家族を応援します。

1925年、北海道でのバター作りから始まった雪印は、今では食を中心に医療、バイオテクノロジーなどさまざまな分野にすそ野を広げています。お客さまに喜んでいただける商品作りはもちろん、おいしいミルクを生み出すための牧草や牛の研究、安心して召し上がっていただくための徹底した商品管理、さらに、商品を最良の状態でお届けするための輸送体制の整備など、さまざまな努力を重ねながら、日本中の家族に、生き生きとした豊かな食生活をおくっていただこうと頑張っています。小さなことでもベストを尽くし、あたりまえのことを大切にしたい。それが、私たち雪印のハートなのです。

